

保育者雑感

岩村安子

ある日、突然玄関に訪れた立派な青年が「先生御対面です」とまじめな顔で私を見つめるので「えっ！ どなたでしたかね」と問い返すと「四十二年前置南坂幼稚園でお世話になりました小島元治です」「あっ！ 元ちゃん！ おもかげがありますよ」それから暫く物語りは尽きませんでした。私がお茶の水の保育実習科を出て二年後に結婚し、霊南坂幼稚園の創立に参与して、そこにお務めをした時第一回の卒業生として送り出したのが元ちゃんでした。弟さんと二人で通って来られたおとなしいお子さんでしたが、今は医博となられ関西で、婦人科医をしておられる由、打絶えて音信もお互にせず、全く思いがけない来訪に涙が出ました。御当人は上京したら一度あいたいと念願して、尋ねたずねて来られたことをきき、今更のように保育者の光栄を、し

みじみ味わいました。

倉橋先生が「保育者は、のれんにうで、おし、みたいなもので、一生けん命世話したお子さんも、道であうと知らん顔をし、成長すれば幼稚園の先生なんか忘れてしまったというふうなものですよ」と語られたことを思い出す。何も報いは望まない、お礼をいって貰うとは思わない、ただ保育した幼い者たちが立派に成長して世の中のお役に立ってもらいたいと祈りながら、日々の仕事に精を出す……そのようなものにも今日の喜びがあったのだとうれしくなりました。

保育者として三十八年を過ごした者には、喜びも、悲しみも、困難にも、苦しみにも会ったといえましょう。殊に戦災による園舎焼失というような特殊な経験は、経営者としての苦心は並大抵ではありませんでした。三年間のプランクにおいて現在の「めぐみ幼稚園」を再開園出来た時、年ごとに卒業生のお子さんたちが入園してくる喜びを持っております。

それにしても、人生の最も大切な基礎といわれる幼児期を、一年二年三年と保育する責任の重大さを思います。朝な朝な嬉々

として集ってくる幼児の顔！ 何と愛らしく清らかなものでしょう。美しい自然の環境の中に、やさしく行き届いた先生方によって導かれる子どもたちは幸福そのものです。

智育に体育に情操教育に、心を砕いて日々の計画を立て、朝の礼拝に、リズム遊びに、お仕事に、団体のひとりとしての訓練をさずけながら、個性を生かした製作や、お遊びを通してよい人柄を形作る土台をすえてゆく楽しみは、保育者ならではの味わえない感激といえましょう。

今年もまた、多くの子ども達が園を巣立って、それぞれの学校にゆく、一人ひとりの前途には試験また試験と多難な道が待っておるでしょうが、園で培われた「神をおそれ、人を愛する」心を忘れないで、何ものにも負けない意思の力と、お友だちと協力するやさしい心で、智能をみがきぐんぐん伸びていって欲しい。あなたがたの力で、明るいお国を作って下さいと祈りをこめ、小さい手に保育証書をうけとる子ども達を見守ります。(昭和三六・二・二五日)